水の週間記念シンポジウム　結果概要

「巧水（たくみ）スタイル推進チーム」の立ち上げを宣言

～節水機器・節水型ライフスタイルの普及で産学官連携へ～

日時　平成 22 年 7 月 30 日(金) 13:30～16:30
場所　科学技術館サイエンスホール(東京都千代田区北の丸公園内)
主催　国土交通省、東京都、水の週間実行委員会

水資源の有限性、水の貴重さや水資源開発の重要性等に対する国民の関心を高め、理解を深める「水の日」(8 月 1 日)及び「水の週間」(8 月 1 日から 7 日)の啓発行事の一つとして、水の週間記念シンポジウムを開催しました。

約 250 名の参加のもと、三日月大造国土交通副大臣の基調講演、パネルディスカッションなどが行われました。

パネルディスカッションでは、北野大明治大学教授をコーディネーターに迎えて、節水の普及等について活発な議論が行われ、**「巧水（たくみ）スタイル」**をキーワードに産学官連携の取り組みを今後も進めていくこと等が提案されました。

概要

1. 基調講演

「日本が誇る水の知恵を海外に」

三日月　大造（国土交通副大臣）

- 個々の水需要に基づく水資源開発、施設整備は限界。自然の変化や世界情勢の変化への対応も必要。
- 日本には、水に関して古くからの知恵、技術、思想がある。これを活かしながら「水を大切に使う社会」を目指すべき。
- このため、総合水資源管理、できるだけダムにたよらない治水などの施策を進めている。
- 日本が誇る水の知恵を海外に。「海外水インフラ PPP 協議会」など、海外の水ビジネスへの積極的取組により、世界の水問題にも貢献していきたい。その手段として、節水技術は有望。

2. 話題提供

「住宅での水消費と節水機器の開発動向」

豊貞　佳奈子(独立行政法人建築研究所)

- 生活用水の 8 割は家庭で、トイレ、風呂の割合が高い。
- 水まわり機器の環境性能は、年々向上。
- 今までどおりの使い方、暮らし方で「いつのまにか」節水でき、さらに快適性を向上させる節水機器への取り替えにより、大幅な省エネが可能。

「環境影響評価のための水使用実態調査報告」

清水　康利（日本衛生設備機器工業会）

- 便器の節水性能は、大きく向上。節水便器の普及を推進しているところ。
- CO2 排出量の削減など確かな予測を行うためには、使用実態に即した機器使用モデルの構築が必要。このため、トイレ使用モデルの標準化を実施。
- トイレは、個人の使い方に因る部分が大きい。大小切り替えを行うことで、一回あたり 1～2 リットルの節水となる。

「節水機器普及の社会への影響」

山海　敏弘（独立行政法人建築研究所）

- 現在は、世界人口 10 億人を前提とした 19 世紀型システム。今後は、100 億人を前提とした新たなシステムを考えるべき。
- 決定打はないが、既存のインフラを有効活用した水利用システムへの改善を図る上で、「節水化」が第一歩。
- 住宅系の節水は、社会的コストの低減等のメリットがある一方、上下水道システムのデメリットは、顕在化しないレベル。
- 非住宅系のトイレの節水には、システム全体を考えた技術的検討が必要。

「節水への取組」

門田　浩司（愛媛県松山市総合政策部水資源担当部長付推進監）

- 平成 6 年の異常渇水を受け、節水型都市づくりに取り組んでいる。
- 事業者は、給水圧コントロール等により漏水防止の努力。
- 市民に対して、節水意識の啓発、意識付けとしての節水型機器購入への補助、雨水利用促進などの施策を推進。

3. パネルディスカッション

○テーマ

節水は新たなエコビジネスになりうるのか？
～節水型ライフスタイル・社会システムの提案～

○コーディネーター

北野　大　　（明治大学教授）

○パネリスト

山海　敏弘　　（独立行政法人建築研究所）
門田　浩司　　（愛媛県松山市総合政策部水資源担当部長付推進監）
清水　康利　　（日本衛生設備機器工業会）
豊貞　佳奈子　（独立行政法人建築研究所）
高辻　育史　　（経済産業省製造産業局日用品室長）
谷本　光司　　（国土交通省土地・水資源局水資源部長）

(節水の取り組みの現状)

- 節水の取り組みを官民挙げて行う必要がある。節水は、CO2の25%削減にも資する重要な分野。工場における水の再利用は既に限界に近い状態。他方、生活部門には節水の余地。節水機器普及の仕組み等が必要。
- 水を大切に使う社会に向け、生活水準を落とすことなく基本的な使用水量を抑制していくのが節水。ここで生まれた水の余裕は、ドライ型のミスト散布による熱中症対策やCO2対策など、新たな用途に活用可能。

(節水の普及に向けて考慮すべきこと)

- 節水型機器では、本来の性能を確保することが必要。
- 節水機器の家計や環境への効果を見えるようにすることが必要。
- 平常時の無駄な水の削減と、渇水時の必要な水も含めた削減は異なる。

(海外への水ビジネスの展開について)

- 途上国は、先進国のいいところを取り入れる。節水技術を売り込むには、世界にいいものであると認識してもらう必要がある。
- クールジャパンといって日本のものが世界から評価されている。快適な節水機器も日本らしい技術で、文化産業とのとらえ方もできるのではないか。
- 同じ条件の下で節水を評価できるよう、国際標準化は必要。

(今後、何をしていくべきか)

- 技術で対応する部分とライフスタイルの中で意識する部分がある。国と自治体が連携して普及啓発を行う必要がある。
- 馴染みのないものは使われない。馴染みを作っていく意味で、節水モデルハウスのようなものができるとよい。
- CO2削減にも繋がるといった、節水の意義をアピールしていくべき。
- ゴミは、分別が当然というように習慣化した。節水もそうなれば最高。
- 産官学の各者が将来像を共有していけるような場が必要。官が中心になるやり方は古い。民が主体となって進めていくべき。
- 節水には負のイメージがある。日常と渇水時での言葉の使い分けや、格好良いと認識されるような言葉が必要。

(節水普及に向けたキーワード)

- 会場アンケートの結果では、「巧水(たくみ)スタイル」が多かった。
- 「巧水」は、水をうまく使うということで、適当なのではないか。

節水普及に向けたキーワード(会場アンケート)

①	巧水(たくみ)スタイル	49件(33%)
②	水活(みずかつ)スタイル	13件(9%)
③	楽水(らくすい)スタイル	5件(3%)
④	水の技	7件(5%)
⑤	匠水(たくみ)スタンダード	10件(7%)
⑥	（日本が誇る）水の知恵	29件(20%)
⑦	ジャパン・ウォーター・センス	11件(7%)
⑧	その他	24件(16%)
	セッスイズム、節水エコライフ	
	跳(ちょう)節水、エコミズ　など	

(回答数　148件)

(まとめ)

- **「巧水(たくみ)スタイル」をキーワードに、日本が世界に冠たる水の国、巧水の国となっていけるよう、産学官の連携と民主導による「巧水（たくみ）スタイル推進チーム」を新たに結成し、節水機器・節水型ライフスタイル普及の取り組みを継続的に進めていく。**